

現代思想

一九八二年七月号 目次

表紙・扉作品 桑原伸之
センス・オブ・ノンセンス 64 古川タク

141

連載 ● 数のコスモロジー 7

数学と日本語

連載 ● 文化のトポロジー ● 第十九回

アンダルシア逍遙二

矢島文夫 10

歩行と思索

ミレー讃

樺山紘一 16

定訳

長野 敬 18

連載 ● 視線とテキスト ● 第二部 ● 第六回

都市の経験 その一

多木浩二 20

音楽とマニエリスム ● 第十八回

誇張の芸術

遠山一行 28

連載 ● ラカンのシニフィアン ● その六

主体の分裂

佐々木孝次 40

マクシム・デュカンまたは凡庸な芸術家の肖像 ● 第二部 ● 10

物語的配慮とその許容度

蓮實重彦 33

特集 空間の記号論

言語空間の記号論

空間のテキスト テキストの空間

前田 愛 54

美術空間の記号論

ピグマリオンの変貌

高階秀爾 74

エッセイ

変貌する都市

篠田浩一郎 134

空間の歪みとしての文化

村上陽一郎 138

山と雲

郡司正勝

87

シンポジウム

空間の表現 そして

あるいは表現の空間

図形楽譜と空間／前衛芸術の戦略
箱庭世界の解読

中村雄二郎
柳一
藤哲
河合隼雄

94

空間と病理

存在のパスpekテイヴ

島弘嗣

68

パフォーマンスの空間

複数の雑音

細川周平

173

パフォーマンスの亀裂

土屋恵一郎

142

都市の記号論

都市のトポロジー序説

内田隆三

150

記号論の展開

クラインの壺

浅田彰

162

現代フランスの思想

ロラン・バルトの仕事

モーリス・パンゲ
三浦信孝訳

183

短期集中連載・モーリス・ドニの世界

画家に棲まう美術史 その二 稲賀繁美

190

連載・ジャンカラの神秘主義 ●第二十四回

生きている身体――

中村元

200

連載・思考の生理学 ●19

「右脳革命」現象

千葉康則

204

研究手帖

錯誤と断言

古田幸男

206

画家に棲まう美術史 後

モーリス・ドニ『理論』における歴史記述の問題

稲賀繁美

セザンヌ——ミッシング・リンクの発見と解釈

さて、一九〇六年に始めて接した△光の等価物は純色である△というゴーギャンの定義が何故ドニにとってひとつの△啓示△たり得たかを十分に理解するためには、この頃——つまりドニの古典回帰後——になって、ようやくドニの頭の中に明確な像を結びはじめた、セザンヌの存在を忘れるわけにはゆかない。

ゴーギャンの等価物定義をドニが知ったのとはほぼ同じ頃、ドニの視野に入ってきたセザンヌの言葉は、象徴主義から古典主義へのドニの理論的断絶を矛盾なく止揚する上で、決定的な役割りを果たすことになる。いわばセザンヌ像の形成は、ドニにとって、象徴主義と古典主義との不連続線を埋める、この上ないミッシング・リンクの発見にも等しかった。このセザンヌを橋わたしに、ドニは、一度は捨てた象徴主義を、今や古典主義と完全に折り合うものとして救出し、△回収△するとともに、逆に、セザンヌからゴーギャンさらにナビ派へという「等価物」の象徴主義形成の系譜を△発見△し、セザン



ヌを九〇年の象徴主義絵画運動の先導者に位置づけることとなる。一九〇六年、ドニは盟友の画家ケル・クサヴィエール・ルセルとともに、エクサン・プロヴァンスにセザンヌを訪ねている。日記一月二六日の条に、この会見の際にセザンヌの語った言葉が記録されているが、その中に次の一節がある。

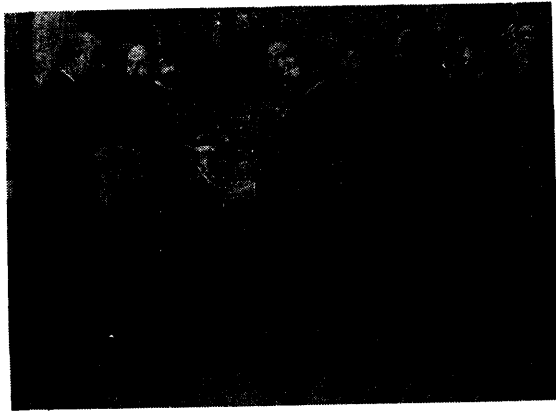
どうやって光を、反射を、いかなるコントラストによって獲得するか。(中略) 光は複製 (reproduction) することはできないが、他のもの、色彩によって表象 (representation) されるべきだ。これを発見した時は満足した(45)。

何故セザンヌがこの言葉がドニにとって、本質的な重要性を持ち得たのか。その理由を探るためには、象徴主義時代のドニのタミノロジーをふり返っておく必要がある。

一八九二年以降、象徴主義時代のドニの基本的立場は、「調和のある、適切な構図で、神秘的な感情の光を表現 (exprimer) する代り

に、今日の画家たちは、人生の情景を表象 (représenter) しようとして工夫を凝らして、そのために、高揚した激情が危機に類することになる、中世的な態度、△理想的△な容貌が」(46) (「シャン・ド・マルスのサロン、ルノワール展」一八九二年) という現状批判の用例に端的に見られるように、△表象否定・表現肯定△の立場であった。

ところが、この表現性中心主義は、ドニの古典回帰とそれに続くヴェイユールとの論争を通じて、ドニ自ら否定せざるを得ぬ謬説と



セザンヌ礼讃 (一九〇〇)
——モーリス・ドニ

なってしまう。古典開眼直後にはこの反動で極端な「表現」敵視の姿勢をとるドニも、結局は、表現と表象の「総合」(この重要な術語自体「古典回帰」後、意味変更されていることについては、註1の拙稿参照) を、「新古典秩序」の名の下に追求することになる。「我々にとっての古代の重要性は全て以下にある。つまり、△個人的類似△の正確さと、△感情△表現 (expression) とに向かう現代(およびキリスト教)の傾向とは反対に、古代はむしろ最も正常な魂の状態における、人間性一般の△典型的表象△(representation) を好む。さて私にとっては、可能な限り単純、明快かつ高貴な形のうちに、偶発的で個人的な生きられた情動を盛り込む仕事、この仕事、あらゆる仕事の内で最も情熱を掻き立てるものだ」(47) (一九〇〇年一月)。

この、「特殊な情動から一般的な表現に達すること。総合」(48)こそ、ラファエロが古代ギリシアと、キリスト教プリミティブ派との「奇蹟的な妥協」の上に成し就げた偉業であり、またアングルが模範とした立場である(「アングルの弟子」一九〇二年)(49)。かくして、表象と表現の総合が、ドニの古典主義の課題となる(50)。

かたや象徴主義時代の△表象否定・表現肯定△と、かたや古典回帰後の△表象と表現の総合△という両立し得ない二つの立場を二つながら救出し、包括する処方箋こそ、ドニが先ほどのセザンヌの言葉、「私は太陽は複製できないが、表象できることを発見した」(51) (「太陽」一九〇六年) という言葉に見いだしたものであった(図1参照)。象徴主義期の「表象」に含まれていた否定的意味あい、今や「複製」に転嫁し、それに伴ってシニフィアンとしての「表象」

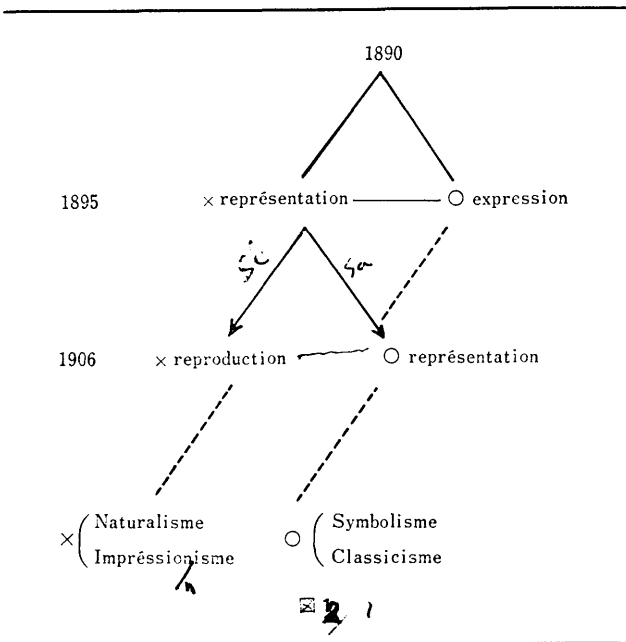
には今後、象徴主義期の「表象」と「表現」との二つの意味内容を包括し「総合」する広義のシニフィエを付与する。一方で、「表象」を「複製」に、「表現」を「表象」と言い換える一歩後退の座標変換を行ない、他方で、「表象」の意味の幅の曖昧さに便乗した語義拡大を行なう。

セザンヌの言葉に着想を得た△表象否定・表現肯定▽から△複製否定・表象肯定▽へ、という、この平行移動と語義拡大の二重操作のお陰で、ドニはついに象徴主義と古典主義とを同一視できる視座を手に入れたわけである。そして実際この後ドニは、△一八九〇年ごろの象徴主義とは、太陽を「複製」する代りに、色彩で「表象」することであった▽、とする適及的合理化をほどこした歴史像を、世間に広めてゆくのである(52)。

セザンヌとゴーギャンをつなぐもの——理想型と因果帰属説

だが、さらに重要なことは、△太陽は複製できないが表象できる▽(一九〇六年一月)というセザンヌの言葉と、同年ド・ロトンジャンの著に見つけたゴーギャンの△光の等価物とは純色である▽との考えとが、ドニの頭の中で二重写しになり、野合を遂げたことである。光は複製できないから、その等価物たる純色を用いて表象せねばならない。かくしてドニはセザンヌ美学とゴーギャンの等価物象徴主義の接点を△発見▽した。両者の美学を同一視するこの解釈はまず『日記』一九〇六年十月(53)に表明され、ついで「太陽」(一九〇六年)に公表される。セザンヌの言う「△複製▽」と△表象▽、この二語の対照のうちに、我々の、文学的ではなく絵画の象

ドニ



らたいて隔ってはいなかったことは、この他にも、例えば、一九〇四年二月三日のエミール・ベルナル宛ての手紙からも傍証される(57)。だが「光は画家には存在しない」「色彩感覚による表象」といった言葉が、これ以前のセザンヌの手紙には見られない以上、この時点で既に死去しているゴーギャンが、△光の等価物としての純色▽の着想をセザンヌから得た可能性は少ないと言える。

徴主義の教義——△等価物▽の象徴主義の教義——を要約するすばらしい定式(54)を見いだすことで、ドニはセザンヌを象徴主義者と認知する。

否そのみではない。この美学上の一致を根拠に、ドニは、セザンヌからゴーギャンへという「等価物象徴主義」形成史の系譜を案出する。「太陽は複製できないものだが、表象できるものだということ」を私は発見した」というセザンヌの見解を「より明確に我々に教えた」のが、「セザンヌの弟子たちのうち最も周知の人物であるゴーギャン」であり、その教えこそ「等価物ない象徴主義」(55)である、とドニは説く。

大切なことは、象徴主義において本質的なことがその自然に対する態度であったということ強調しておくことだ。△複製▽してはならなかった。△表象▽せねばならなかったのだ。何によって？ 造形的な彩色された△等価物▽によって。この文章はポール・セザンヌに由来する。セザンヌは一九〇〇年の運動の先導者であった。(『十九世紀・二十世紀フランス美術展』チュエリッピ、一九一七年、カタログ序文)(56)

かくして、等価物の美学がセザンヌからゴーギャンやナビ派に直接伝授されたものであるような印象を読者に与える△系譜▽がここに創出され、美術史家はこの△神話▽、根拠不明の幻の系譜に悩まされることとなった(図2)(56)。

たしかに、晩年のセザンヌの画論が、ゴーギャンの「等価物」か

ゴーギャンとセザンヌが別々になした共通の△発見▽は、互いに知らぬながら共通のパラダイム変換を経験していた二人の前衛画家に到来した一種の△偶然の符合▽、△同時多発的発見▽の類なのである——むろんゴーギャンがセザンヌの絵を愛蔵していたことは忘れてはなるまいが(30)。

この二人の独立した発見(ゴーギャン一八九六年以降、セザンヌ一九〇四年以降)をドニが△セザンヌからゴーギャンへ▽という、文献的には編年的に前後関係の転倒した△系譜▽に無理矢理押し込んで△神話▽を捏造してしまったのは、もともとドニの脳裏に「セザンヌのゴーギャンへの影響」(58)という△理念型▽がこびりついていたのである。実際かつてゴーギャンはセザンヌに師事していたのである。とすれば、一八八八年に既にゴーギャンが等価物の美学をセリュジェに語った以上(と今はそう信じているドニにとって、セザンヌがそれ以降に例の発見をしたのでは、なぜ二人が同じ考えを抱くに至ったのかの△理由▽がつかなくなる。これでは単なる△偶然の一致▽になってしまう。むしろドニはセザンヌとゴーギャンの美学の親近性に気付いた時、その類似の理由をおのずと師弟間の伝授という△因果律▽に帰属せしめたわけである。セザンヌがゴーギャンより後に、しかも二十世紀になってから、△光を複製する代りに色彩で表象すること▽を発見したなどという辻褃のあわない△史実▽が存在する可能性など、ドニはもとより夢想だにしなかったに違いない。要するにドニは一九〇六年に彼の視野に入ってきたセザンヌとゴーギャンの言葉を、その出典年順には全く無頓着に、△師弟関係▽に沿って△論理的▽に再構成したのである。しか

しその「論理性」が逆に短絡をまねき、ドニをして師弟関係という「理念型」に則した架空の「因果帰属説」の案出へと誘い込んだわけである。

セザンヌからゴーギャンさらにナビ派へという一見まことしやかなこの象徴主義形成の系譜は、実はドニの「追理解」に際して忍び込んだ「過剰解釈」が「理念」としての系譜と一致・競合し、循環を起こしたために発生したひとつの閉鎖系、トートロジーに他ならないのである。

*

一九〇六年。この年ドニはセザンヌの教えを受け、それを梃子に象徴主義と古典主義を統合したばかりか、他方ゴーギャンの「等価物」を知るにおよんで、はじめて一八八八年のゴーギャンの「福音」の「本意」の意味を「理解」できたとともに、その「等価物」が先のセザンヌの教説にぴたりと符合することに気付いて、セザンヌからゴーギャンへという象徴主義形成史の系譜まで「発見」した。ドニがセリュジェを介してゴーギャンの教えに接したのは、この大いなる「歴史」の発見の年一九〇六年を去ること、既に十八年の昔であった。

この遅延を得てはじめてドニは、あの時のゴーギャンの言葉の意味を、当時より深く「追理解」し得る情報を手に入れたのだが、逆説的なことにその情報は、意味をなす (make sense) ように統合的に再構成されるや、当の「史実」とは全く相貌を異にした「過剰解釈」へと偏向した結晶を析出してしまふ。追理解に際して援用され

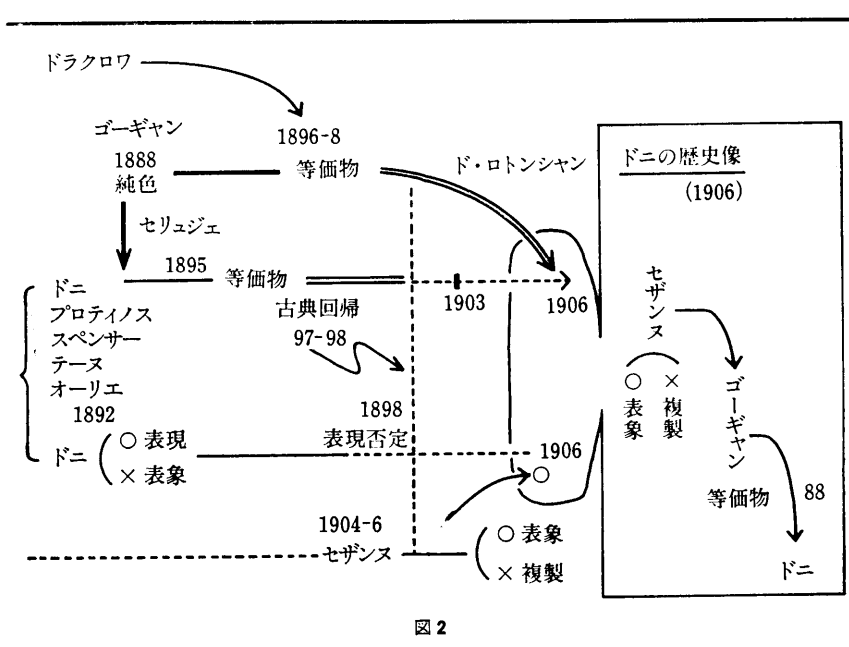


図 2

た史料の合理的な利用が、歴史そのものを「合理化」してしまう。追理解——歴史理解の可能性それ自身が「史実」からの逸脱の契機となるというこの矛盾——この矛盾に歴史記述にまつ根本的問題が集約されている。

自伝の論理、歴史学の論理

これまでドニ引用者は、ドニが一九〇六年以降に語るこの「過剰解釈」を「史実」と短絡的に混同することが少なくなかった。だが、ドニがここで案出した、象徴主義形成にまつわる「系譜」は、あくまでも古典主義転向後のドニの視座と思ひ込みにとらわれた「回顧的空想」(Nostalgic fantasy; retrospective fantasy) の産物に他ならなかった。回顧的合理化の産物である「証言」と「史実」とを混同するような安易なドニ引用は、文献学的反省を欠いた、きわめて危険かつ未熟な態度と言わねばならない。

しかしながら、適及的合理化によって「過去」を「歪曲」し「捏造」したとしてドニを批判するのはお門違いである。たしかにドニは、ゴーギャンの「等価物」を一八八八年の文脈に適用して適用するという、「史実」の「歪曲」を行ない、さらにはセザンヌからゴーギャンへの「等価物」理論の伝授という、ありもしない「史実」を「捏造」したには違いない。だがドニの想起した「過去」がどれだけ「史実」と異つていようと、ドニにとって、彼が想起したあの「過去」以外の過去は存し得ない。

むしろ、世紀末象徴主義運動にかかわっていた当事者ドニにとって、決して当時の周囲の状況が自明の所与としてあったのでは

ない、ということ、このドニの「史実」の「歪曲」、捏造は示唆している。一九〇六年になってはじめて、「一八八九年頃我々の理解していた象徴主義」とセザンヌ・ゴーギャンとを結びつけることが可能になった。その十六年の歳月こそ、ドニが自分の個人史を位置づけるべき周囲の状況を手入するのに要した遅延であり、自己の体験を、比較的「客観的」な歴史の文脈に組み込む「歴史化」に要した時差に他ならない。

ドニという個人にとって、この世に生を受けてみると、既にセザンヌからゴーギャンへという象徴主義前史があらかじめ存在している、その上で彼が象徴主義運動を展開したわけでは全くない。むしろ自分たちの営みの土台となった「過去」は、自分たちの創作活動という主體的な場の中で、はじめて発見され形成されていったのである。「過去」は決してなにか思い出すものではなく、「想起」の際に作られるものである。換言すれば、世紀末の象徴主義理論そのものなどにも存在せず、あるのはただそれについてドニが加えた解釈のみであり、逆にある時点でドニの立てた「過去」解釈こそ、その時のドニにとって世紀末象徴主義そのものの謂なのである。「過去」とは、歴史空間の中の一静止点ではなく、常に現時点から回顧して、持続の内に適及的に形成される、一期一会、その場限りの歴史的形作物なのである。

たしかにこの歴史認識に立脚して想起される「過去」は、ドニがその「過去」を想起する視点に従って刻々と変化する。一九〇三年における一八八八年のゴーギャン像と一九〇六年のそれとは、実際大きく異っている。だが視点が異れば同一の対象も形や大きさに

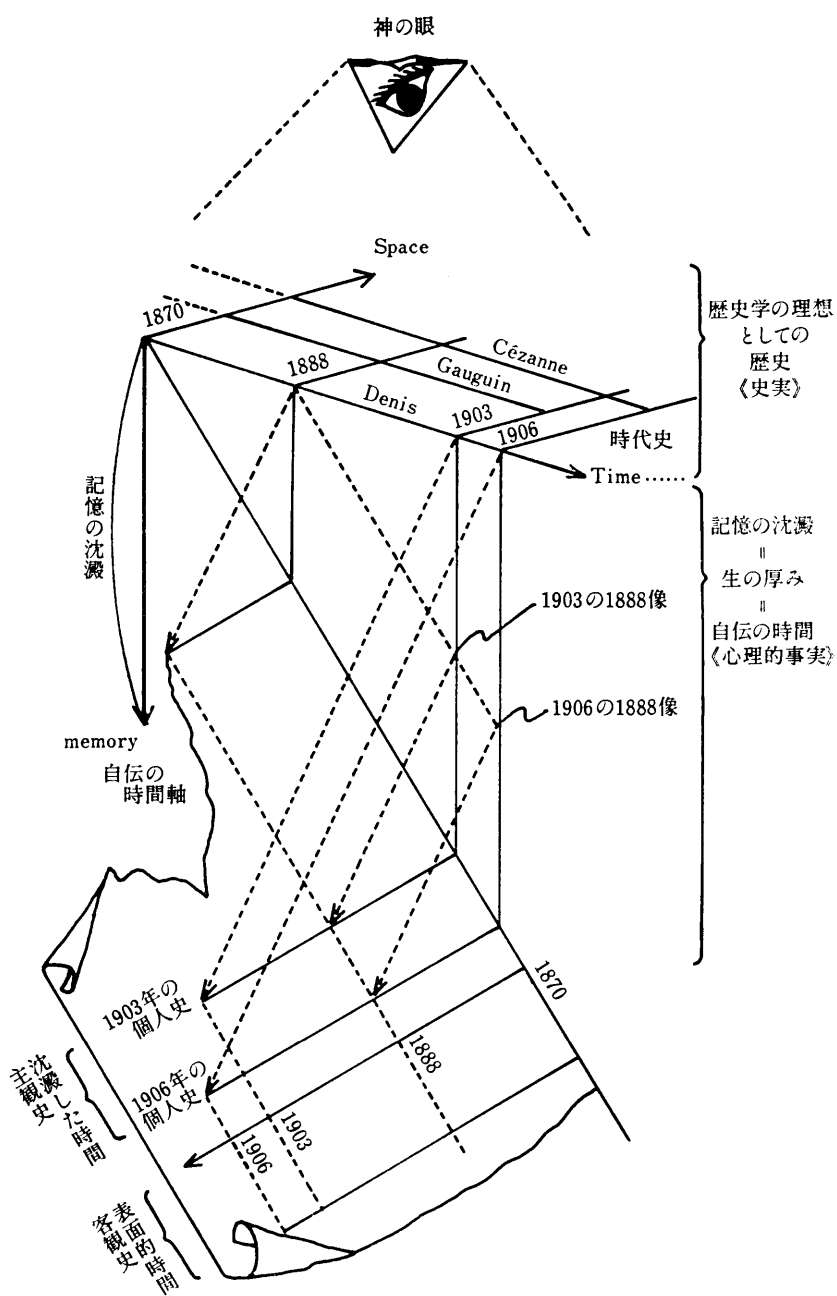


図3

おいて異った相貌を呈するのはむしろあたり前のことである。ドニ
 が人生を歩むにつれて、一八八八年像は、想起のたびに姿を変じ、
 沈澱してゆく。一八九〇年頃の象徴主義はドニの生きている限
 り生成と変貌を停止しない。新史料に触れ、新しい視座を獲得する
 度にドニの心理的事実上の一八八八年は不断に更新されてゆく。
 ドニにとっての一八八八年というものは、従って、その上にド
 ニが回顧的・適及的に与え、つけ加え、改めていった解釈の沈澱物
 のなす堆積の総体としてのみ存在する。

しかし、このように現在の視点に拘束された幾つもの一八八八年
 像、適及的再解釈を下す毎にその姿を変じてしまう多様で把みどこ
 ろのない過去像は、歴史家には承認できないものであろう。歴史家
 が求めなければならないと信じているのは、 Δ 史実 ∇ としての、唯
 一絶対の一八八八年像だからである。

だが、一体真の Δ 史実 ∇ としての一八八八年なるものは、どこか
 に存在しているだろうか。たしかに我々はドニの Δ 過去 ∇ の歪みを
 部分的でこそあれ Δ 反証 ∇ し、より Δ 本当の史実 ∇ としての一八八
 八年に近づき得たかもしれない。だが Δ 史実 ∇ としての一八八八年
 は、仮にいかなる新史料が発見されても、もはやしゅせんその史料
 の提出する Δ 近似値 ∇ を頼りに推定される Δ 不在物 ∇ にすぎない。
 そもそも一八八八年現在など今はどこにも在りはしないからであ
 る。とすれば Δ 史実 ∇ なるものは、ただ神の目を通してのみ、視点
 が存在被拘束的でなく、時間に遍在する神の目を通してのみ、把握
 し得る態のものであろう。この遍在する目を通して、 Δ 史実 ∇ の流
 れを一望の下に見下ろすことこそ、歴史家に課せられた、不可能の

課題である。

かたや遍在する神の目の照覧に供すべく、厚みのないのっぺらぼ
 うの表面に仕立てられなければならない Δ 史実 ∇ のモザイク的集積
 としての歴史（もともと互いにびたりと当てはまるピース（史料）
 からは出来ておらず、そもそもそのピースもいくつか欠落している
 ために、永久に完成しないジグソー・パズルと言わねば）と、か
 たや存在被拘束的な適及的であと知恵、合理化で、いやおうなく齟齬
 をきたし、矛盾撞着し、衝突し、食い違いを残したまま、重畳し、
 沈澱・堆積してゆく、 Δ 過去 ∇ ・ Δ 心理的事実としての歴史 ∇ 。こ
 の両者の差こそ、歴史家の理想とする Δ 史実としての歴史 ∇ ・ Δ 客
 観史 ∇ と、回想の織りなす Δ 過去像としての歴史 ∇ ・ Δ 主観史 ∇ と
 の差に他ならない（図3）。

今や客観史と主観史の対立は、実在的投企ならざるを得ぬ Δ 歴史
 ディスクール ∇ を学問の名の下に忘却してただ単に選別された史料
 を統合的・合理的に再構成することのみに腐心する Δ 歴史研究 ∇
 と、他方それ自体では学問たり得ぬ Δ 歴史ディスクール ∇ との対立
 に置換され、ますます埋め難い二分極化を呈したのみで一向に Δ 史
 実 ∇ には達しない（図4）59。

Δ 心理的事実としての過去像 ∇ と Δ 客観的史実としての歴史 ∇ と
 の間のこの埋め難い亀裂、 Δ ディスクールとしての歴史 ∇ と、 Δ 歴
 史研究 ∇ が追い求めてもしゅせんもはや永遠に失われた Δ 不在 ∇ で
 しかない Δ 史実そのものの歴史 ∇ との間のこのすき間、一見理不尽
 なこの両者のずれこそ、しかし実は Δ 生の厚み ∇ であり、生きられ
 た歴史の持つ厚みの証ではないか。

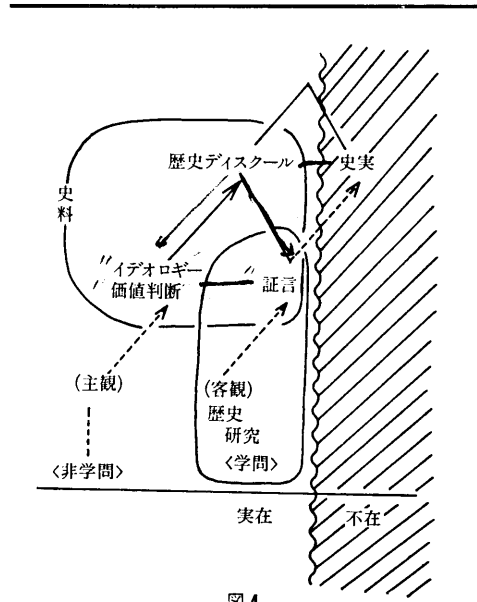


図 4

歴史を生きる人はいやおうなく「歴史実」とは違う歪んだ過去像を築いては、その上に未来を構想し、劈いてゆく。その「歴史実」と過去像との差異・亀裂こそ、歴史を生きる人が「歴史実」に賭けた生の重みが露出する。歴史家が、しよせん達成不可能な営みと知りながら「歴史実」を求めてやまないのは、決して「真実」なり「歴史実」のためにするのではなく、ひとえにこの「生の厚み」を浮き彫りにするよりどころを獲得するためでなければならない。

凡例注記

引用文「……」中、「……」は原文イタリック、傍点は原文大文字を

- XX Jahrhunderts, Zurich Kunsthau, 1917. 展覧会カタログ序文。『*l'Amour de l'Art*』誌一九二〇年十二月号論文 (N. T. に再録) 等。この辻褄あわせを根拠とした「ポール・セザンヌは一九〇〇年の運動の先駆者であった」とのドニの見解が文獻的には「趣及」(après coup) であることは既に Barazetti (op. cit. p. 45) が夙に推論している。彼女は「セザンヌに帰する十分な根拠があると私の考えていた意見の説明をこの老匠匠の口から耳にするのが (一九〇六年のエクスの) 巡礼の目的だった」というドニの証言 (N. T. p. 119) に着目して、両者の美学を「先輩が後輩へおぼした反応というよりは彼らの探求上の符合」(Barazetti, op. cit. pp. 45-46) と推測する慧眼を見ている。が、このドニの証言自体の信憑性は文獻的には確認不可能である。
- (67) Emile Bernard, 《Souvenir de Paul Cézanne》, *Mercur de France*, 16-X-1907, p. 620. 池田忠治訳編『セザンヌの手紙』筑摩書房、一九六七年、二四六頁。
- (68) Ta. p. 72. 「宗教絵画鑑賞書き」(一八九六年)。
- (69) というのも、各々の史料の産出年代に配慮を払わずに、それら同志をつき合わせ、その整合性手がかりに「歴史実」を再構成しようとする目論見の孕む危険性は、既に我々がドニ自身の象徴主義系譜「捏造」に見たとおりであるし、かといって逆に我々の試みたように、各々の史料の産出年代や視座まで問題視しようとする場合には、たしかに各々の史料の持つバイアスを相対的に推測し、ひとつの「歴史実」が各々の史料産出者にとって、史料産出時に「何」であったかを記述することはできても、もはや、それら相反する証言、解釈を生み出した虚なる源泉、もはや永遠に不在である、唯一絶対の「歴史実」それ自体について語る野望は放棄する他ない。学問としての歴史学は、究極的には、歴史史料について語ることはできても「歴史実」を語ることはできないのである。むしろ、これら相い容れず矛盾撞着する史料群を、その視点の差、認識レベルの相違に従って、全体として秩序づけ、成層化することはできる。お

示す。地の文中「……」は厳密な引用「……」と区別された、ひとことでその考えを強調する。引用文中の引用は「……」を用いる。

註

* ドニの著書に関する略号

- T: *Théories, du Symbolisme et de Gauguin vers un nouveau langage classique*, Paris, Rouart et Watelet, 1920 (再版1912)。
Ta: *Théories, du Symbolisme au classicisme, présentation par O. Revault d'Allonnes*, Paris, Hermann, 1964。
Jr: *Journal*, Tome I (1884-1904), Paris, Colombe, 1957。
Jr: *Journal Tome II* (1905-1920), Paris, Colombe, 1957。
N. T.: *Nouvelles Théories, sur l'art moderne et sur l'art sacré*, (1914-1921), Paris, 1922。

- (45) Jr. p. 29。
(46) T. p. 6. 他、T. p. 23, Ta p. 48, Ta. p. 72 など参照。
(47) Jr. p. 159。
(48) Jr. p. 160。
(49) T. p. 95。
(50) T. p. 209。
(51) T. p. 222. など、T. p. 253. 「セザンヌ」に再出。
(52) T. p. 253. 「セザンヌ」一九〇六年。T. pp. 267-268. 「ローキアンとヴァン・ゴッホから古典主義」(一九〇九年)。註96参照。
(53) Jr. pp. 47-48。
(54) T. p. 223。
(55) *Idem*。
(56) E. C. Opler, *Fauvism Reexamined*, Garland, New York & London, 1976, p. 316, foot note. (その後「セザンヌ」提出した「セザンヌ」の複製の代りに表象「即ち派系主義の「等価物」とする「合理化」を繰り返すことになつた (Französische Kunst des XIX u

のこのまわりに、かくのうとく相反する幾多のディスクールを析出させる集積させる磁場の源泉は、自分をとりまくこの星雲の大きなゆえに歴史上の出来事として認定される。とすればこの磁場をこそ歴史の現場と呼ぶべきであり、この磁場の作用そのものの解明をこそ歴史学の対象とすべきではないだろうか。

(60) 一九〇八年にサラー・スタインが記録したマティスの教えには、「色彩や遠近の関係でもって、あなたがモデルに見る諸関係の等価物を構築しなさい。(中略) モデルであれ、他の主題であれ、それを表象することが大切なのであって模写することではない。モデルとあなたの絵との間には色彩の関係はあり得ない。考慮すべきはただあなたの絵の色彩関係と、モデルの色彩関係との等価性だけなのです。」(Matisse, *Écrit et Propos sur l'art*, présentés par Dominique Fourcade, Paris, Hermann, 1972, pp. 72-73) とある。本稿で扱った「ローキアン」の「偶感抄」の「等価物」(註23)および「それとドニが同一視したセザンヌの複製でなく表象」の考えとの類似には看過すべからざるものがある。マティスはドニ宛ての手紙(一九〇七年 Jr. p. 61)で「ドニにド・ロトンシヤンの『ローキアンの生涯』を読んだかと尋ねてゐるが、実はこの時マティスの所にマティスが寄寓している。とすれば「マティスは「等価物」の考えをド・ロトンシヤンの本を介してローキアンから学んだ可能性が生じる。両者の親近性を示唆したオブラーの指摘(E. C. Opler, op. cit., pp. 258-259)に、我々はかなり有力な傍証を得たと言えよう。ドニとマティスの美学の親近性も故なきことではなからのである(ドニとマティスの関係については註1の拙稿参照)。

五月号掲載分訂正

- p. 188, 上段 1, 17: 公訳一八九一年→一八七四一五
p. 198, 註15: *Ibid.* Vol. 2, → *Ibid.* Vol. 1,
p. 197, 註16: *Ibid.* p. 130 → *Ibid.* Vol. 1, p. 130.
「……」
(うなだ しげな・比較文学比較文)